

新制大学開学60周年

本学は、今年、新制大学開学60周年を迎えました。

戦後の荒廃から立ち直り、いち早く女性の教育を再開しえたのは、
当時、本学の教育に携わっていた教職員の献身的な努力と、何より、

戦後の日本社会の新生を担うべく、学問への情熱を持ち続けた

本学在学学生たちの強い意志、そしてそれを支えた卒業生の思いゆえと言えます。

以下、『お茶の水女子大学百年史』（「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会、1984）

によりながら、新制大学開学時を振り返ってみましょう。

1 新制大学の発足およびその経緯

戦後まもない1945（昭和20）年秋、東京女子高等師範学校は「旧制の大学令に基づく国立女子大学の設立計画」を立てました。当時の教官たちによる連日連夜の協議になるものでしたが、「文部省省議」は通ったものの「大蔵省段階で国費不足の理由でさし止め」となりました。その後、46年の教育刷新委員会の設置、「女子教育研究会」設立、47年の大学設置準備委員会の設置等を経て、1949（昭和24）年、国立学校設置法の公布により、国立新制大学の一としてお茶の水女子大学が設置されました（初代学長・野口朗）。他校との合併の可能性を廃し、単独昇格を果たしえたのは、当時においてすでに70年を越える女子の最高学府としての伝統と社会への貢献を有していたことに加え、東京女高師教授会、また卒業生の情熱に後押しされてのことでした。設置時は文学部・理家政学部の二学部でしたが、翌50（昭和25）年には文教育学部・理学部・家政学部の三学部となりました。

なお、茶の花に「大学」と記した大学徽章は、50年、学生投票によって決定されたものです。



『東京女子帝国大学創設趣旨並組織』（昭和20年11月29日）

『東京国立女子大学創設趣旨並組織』（昭和22年11月）

『国立総合女子大学創設促進』（昭和23年2月5日）



「新制大学設置認可申請書」（昭和24年）

2 開学式 (1949年11月5日)

1949 (昭和24) 年は、1875 (明治8) 年の東京女子師範学校創立から75年目にあたり、また新制大学お茶の水女子大学開学の年でもあったことから、11月5日、皇后を迎えて「東京女子高等師範学校創立七十五周年お茶の水女子大学開学記念式」が挙行されました。当日は在學生に加え、500名近くの桜蔭会員が参加しました。本学の新しい門出を祝すかのごとき快晴に恵まれたといえます。



記念式に続いておこなわれた学芸会の様子



本館内を歩く香淳皇后



装飾された正門

新制大学開学60周年

新制大学開学60周年



お茶の水女子大学長宛て宮内庁長官通知（昭和24年10月15日）
 「皇后陛下お茶の水女子大学において挙行の創立七十五周年並びに同大学開学記念式へ行啓の節賜れる御言葉」



「東京女子高等師範学校創立七十五周年お茶の水女子大学開学記念式次第」
 「式典並祝賀会概要」
 「東京女子高等師範学校創立七十五周年お茶の水女子大学開学記念絵葉書」

3 附属校園の変遷

新制大学設置に先立ち、1947（昭和22）年3月、学校教育法が公布されたのをうけて、4月より新学制に基づいて、戦時中附属国民学校となっていた小学校が再び附属小学校という名称に戻り、また附属中学校が開設されました。男女共学を原則とする新学制の精神を尊重し、とくに義務教育段階である中学校までは共学とすることが決定されました。一方、附属高等学校は、これまでの附属高等女学校の伝統を受け継ぎ、女子だけの学校として48（昭和23）年4月に設置されました。

附属幼稚園は、戦争激化のため、1945（昭和20）年3月にいったん閉園となりましたが、同年11月より保育を再開しました。

こうして本学は、幼稚園から高等学校にいたる各階梯の附属校園を同じキャンパス内に有する、全国でも数少ない環境を備えた新制大学として発足することとなったのです。



「お茶の水女子大学開学記念東京女子高等師範学校創立七十五周年アルバム」

4 徽音祭



徽音祭パンフレット（昭和36年～平成20年）

第一回徽音祭は、1950（昭和25）年に開催されました。しかし、その起源は、46年に開催された文・理・家政・体育各科競演の演劇祭にあるようです。このとき、在校生の圧倒的な支持により、講堂・徽音堂に由来する「徽音祭」との名称が決定されたとのこと。以来、現在にいたるまで、徽音祭は学生たちのさまざまな活動の発表の場として、年々華やかさを増しながら、一度もとだえることなく開催され続けています。

（以上、文責・菅聡子）

新制大学開学60周年